



イメージキャラクター
デコポン

Menu



1・・・巻頭リレーメッセージ

門井徳孝:DECOポン事務局

2・・・特集

「自分たちのまちは自分たちで担う！」
～NPO 法人エコデザイン市民社会フォーラム代表理事
萩原喜之さんインタビュー～

4・・・連載 DECOポンズ・ボイス

「買い物で世界を変える～フェアトレード～」
胤森なお子さん:フェアトレードカンパニー株式会社

「畑からの贈り物」
伊勢戸由紀さん:にんじんCLUB 代表

5・・・連載 デコポン・ライブラリー

～「貧困問題」編～

6・・・報告 キックオフフォーラム

～社員の「エゴなエコ」応援します～

7・・・報告 第1&2回セミナー

[第1回] キャンドルナイトをやらナイト! 2006
～でんきを消して、スローな夜を。～

[第2回] パレンタインに贈りたいん!
～フェアトレードのチョコはいかが?～

8・・・告知 出張DECOポン勉強会開催

編集後記

成功の秘訣は「単においしかったから」

1 月21日に開催したDECOポンキックオフフォーラムでご講演いただいた、大地を守る会・藤田会長のインタビュー記事を読んで、とても印象に残った言葉があります。「よく成功の秘訣を聞かれますが、シンプルに我々の提供する野菜や果物がおいしかったからだと思います。有機野菜の宅配…。言葉で表現するのは簡単ですが、これを事業として成立させるのはとても大変なことです。農薬や化学肥料を使わずにおいしい野菜を生産する難しさはもちろんです。そうしてできあがった野菜は、虫が食っていたり泥がついて曲がっていたりで「見た目」がよくない上に、値段も高い。普通に考えれば商売にはならないでしょう。にも関わらず、有機野菜という言葉自体がほとんど知られていない1970年代から無借金で有機野菜の宅配事業を続けてこられた理由が「単においしかったから」。

「日本の自然環境や農業を守るため」だけを訴えていたら、おそらく成功はなかったと思います。消費者の「おいしいから買う」という選択は、「世のため人のため」というボランティア精神からではなく、単純においしいものを食べたいという「自分のうれしさを満たすための欲求」によるものです。

「環境保全」「地球温暖化防止」という言葉を聞くと、なんとなく肩に力を入れて構えてしまい、結局「何をしたらいいのかよくわからない」となりがちです。でも、大きなことを難しく考えなくても、「自分のうれしさのため」と考えて行動したことが、結果として環境を守ることにつながるかわかれば、無理せず続けられる気がしませんか? 自分のためにした当たり前前の行動で、環境を守るために一生懸命汗を流している人たちが喜んでくれるのだとしたら、なんとなく自分もうれしくなりませんか?

DECOポンの役割は、そういった「自分もうれしい」という“気づき”の提供だと思っています。みんなが少しずつ「自分のために」行動を変えていったら、いつの間にか地球も元気になっていた…。いつかそんな日が来ることを願いつつ、僕自身も「自分のために」という想いでDECOポンの運営を続けていきたいと思っています。

DECOポン事務局 門井 徳孝



自分たちのまちは自分たちで担う!

NPO法人 エコデザイン市民社会フォーラム代表理事 萩原喜之さん インタビュー



DECOポンの正式名称は「デンソーエコポイント制度」。このしくみは2005年の愛・地球博でその取り組みが始まった「EXPOエコマネー」を母体になっています。レジ袋を断るなど、簡単に参加できるEXPOエコマネーには、万博期間中にのべ60万人の来場者が参加し、大きな成果を上げました。現在も進行中のこのEXPOエコマネー事業の生みの親とも言えるNPO法人エコデザイン市民社会フォーラム代表理事の萩原喜之さんに、DECOポンへの想い、また27年にも及ぶ環境活動への想いをお話いただきました。

インタビュー：蒲勇介(ORGANデザイン室)



自分の足下、名古屋市から変えていこう

— こんにちは。本日はよろしくお願いします。実は僕、小学生の頃にリサイクルニュース(※1)を毎月楽しみにしていました。母がフリーマーケットやガレージセールをやる人で、リサイクルの活動に熱心だったんですけど、今でもリサイクルニュース経由で買ったものが家にありますよ。その仕掛け人にこうしてインタビューさせていただけるというのは感慨深いです。

萩原：そのころ小学生だったの？それはそれでショックだなあ。(笑)

— 長い活動歴をお持ちの萩原さんですが、エコデザイン市民社会フォーラムだけでなく、これまでも様々な環境事業に取り組んでいらっしゃいますね。

萩原：中部リサイクル運動市民の会という名前で1980年に活動をスタートしたとき、「宇宙船地球号を救おう」という呼びかけで、地球環境問題を解決しようと始めたんです。リサイクルなんていう言葉がまだ日本にない時代に、最初の10年はガレージセールを開催したり、リサイクルニュースという雑誌の発行をしたりと、イベント屋さんのような仕事をしていました。

しかし、99年の2月に名古屋市のゴミの非常事態宣言を受けて、実は地球環境どころか自分たちの足下、名古屋市を変えようとさえも思っていなかったことに気づいたんです。

当時たかだか10人の団体でどこまでできるかわからないまま、でも実際に計画を作ってやってみたら2年で23%のごみの減量が達成できたんです。その頃から、改めて『地域』というところに立ち戻って考えるようになりました。

自分のまちを持続可能にすることが、まずはじめの一步。

それぞれの人が自分のまちをやればいい。その積み重ねが宇宙船地球号なんですよ。たぶん。



自発性の連鎖が社会を変えていく

— なるほど。そういう環境活動の原体験から、『一人ひとりが自分のこととして参加できる』しくみが必要だと思い始めたのですね。

萩原：はい。そのしくみの方向性を模索しているときに、二つの映像に出会ったことがその後大きく影響しました。

一つは、「エンデの遺言—根源からお金を問う」(1999年5月4日放送NHK)です。それまで環境問題とは産業の暴走だと考えていました。社会の暴走を何が引き起こしていたかというところを流れる血液であるお金だと。お金が変わらない限り環境問題は解決しない。そこから「お金を選ぶ」というキーワードを得ました。

もう一つは「ペイ・フォワード」(PAY IT FORWARD ミミ・レダー監督)です。11歳の少年トレバーは社会科の授業中、担任の先生から「もし君たちが世界を変えたいと思ったら何をしますか?」と問いかれます。トレバーが思いついたアイデア。それが「ペイ・フォワード」——他人から受けた厚意をその人に返すのではなくまわりの別の人に送っていくというアイデアでした。ここから「自発性の連鎖」というキーワードが生まれました。社会を変えようとするとき、環境税のように法で規制するのではなく、人の自発性の連鎖で変えていきたいと思いました。そして持続可能な社会は「自分たちのまちは自分たちで担う!」という人が住むまちからしか始まらないという確信につながったんです。



※1 10年前に発行していた雑誌「リサイクルニュース」 ⇨

—その確信が、万博を機に形になっていくわけですね。

萩原：当初の万博に対し市民団体は反対の立場をとる人が多かったんです。でも私は、反対賛成ではなく地域の主体として関わりたいと思いました。博覧会協会ができてすぐ、企画運営委員として環境PTのゼロエミッション部会に参加。「見せるゼロエミッション」のツール作りに取り組んでいました。来場者に対して何を表現するのか、むしろ来場者一人ひとりにどう関わってもらい、何を伝えていくのか。これまで温めてきたキーワードが、EXPOエコマネーという形に結実していったのです。

誰にでもできる環境行動が、わかりやすくポイントとして貯まっていく。そして貯めたポイントも環境によいことに使ってもらおう。しくみをできるだけシンプルにすることで、たくさんの方が継続的に関わってくれるようにとも考えていました。

—それでは最後に、DECOポンに参加する方へメッセージをお願いいたします。

萩原：デンソーという会社を「自分のデンソー」って言えたらすばらしいと思います。リアリティのある自分の家族、自分のまち、自分の会社。そのために今できることをやる。人のためではなく、自分がデンソーを愛せるのか、自分がわくわく地域と関われるのか、自分がわくわく働けるのか。愛せる会社、愛せる地域にする。DECOポンはそのためのツールなんです。

環境にいいことしよう、という言葉はもう響かないと思います。毎日わくわく生活していただけるために。自分のための「エゴなエコ」を、楽しみながら実践してみてください。

—ありがとうございました。👤



「自分のデンソー」って言えたら幸せ

—そうして生まれたEXPOエコマネーから、今回のように一企業であるデンソーのプロジェクトとして飛び火した…

萩原：今、新しい社会システムを、新しい枠組みで作っているという実感があるんです。行政、市民団体、企業がいっしょにやってる。デンソーの方とお話して感動したのは、デンソー社内だけでなく、他の企業にも広がっていくことで初めて成功だと考えてくださっている点です。これはまさに自発性の連鎖です。DECOポンは環境、家族、社員というキーワードを持っているところがおもしろいと思います。

【Profile】

NPO 法人 エコデザイン市民社会フォーラム代表理事
萩原喜之さん

1953年静岡県生まれ。大学進学を機に名古屋へ。27歳の時、3年勤めた会社を退職して、新たな仕事を探している最中に、リサイクル活動を行う団体を知り、誰でも参加できるリサイクルシステムと場作りを目指し、1980年、「中部リサイクル運動市民の会」を発足。現在、名古屋市内44カ所にて資源回収所「リサイクルステーション」の設置やフリーマーケットの運営をはじめ、エコ商品の開発、リサイクル情報をまとめた冊子の制作、市民参加型リサイクル事業「EXPOエコマネー」など、さまざまな環境活動に取り組んでいる。



NPO 法人 エコデザイン市民社会フォーラム代表理事
萩原喜之さん

買い物で世界を変える

～フェアトレード～



胤森(タネモリ) なお子
フェアトレードカンパニー株式会社 常務取締役

DECOポンのポイントメニュー内「エコ商品を買う」の項目で紹介されている「フェアトレード」。まだあまりなじみのない言葉かもしれません。日本語にすると「公正な貿易」ですが、もっと分かりやすく言うと、「買い物で国際協力と環境保護に参加する」ということです。「フェアトレード」は、貧困に苦しむ途上国の人々を支えようと1950～60年代に欧米で始まった活動で、寄付や物資援助のような一時的な支援ではなく、手工芸品生産などの仕事の機会をつくり、その製品を買うことで現地に収入をもたらす、持続的な支援の方法です。

手紡ぎ、手編みでつくられる
ネパールのシルク・ニット



私たちは1991年から活動を始め、現在バングラデシュやインドなど20ヶ国の生産者団体とパートナーシップを組んでいます。フェアトレードの専門カタログ「ピープル・ツリー」では、手織り、手刺繍、草木染めなどの手仕事でつくられる衣料品、自然素材を使った雑貨、オーガニック農法でつくられるコーヒーや紅茶などを紹介しています。

フェアトレード製品は、できるだけ農薬や化学物質を使わない自然素材を原料とし、人の手をかけてゆっくりつくられるので、環境への負荷やエネルギー消費が低い「エコ商品」でもあります。つまり、フェアトレード製品を買うことで、貧困をなくすと同時に地球を守ることに貢献できるのです。みなさんもぜひ、「ピープル・ツリー」カタログの中からお気に入りを見つけ、「世界を変える」ことに参加してください！



畑からの贈り物

伊勢戸 由紀
にんじん CLUB 代表

今日はDECOポンに興味のあるみなさんに、私が何度も出会って体験してきた「畑からの贈り物」についてご紹介したいと思います。「畑と台所をつなぐ」をモットーに、にんじんCLUBという仕事に就き20年。若いときに感じた、添加物が入った便利(過ぎる)な食品への違和感は、今も大事な感性として残っています。しかしその感覚より、うれしくてうれしくて感動したこと。それが生産者や畑からおすそわけしてもらえた、たくさんの畑の感動体験です。

にんじんCLUBの活動の一環で、消費者、コミュニティビジネスの研修生、農業を志す若者、就職活動の一環など老若男女を問わず、知多半島の美浜町で無農薬栽培の米作りを続けて今年で15年目になりました。去年も10月に30人で稲刈りを行いました。脱穀後の道に落ちた米粒を拾いながら、参加者のお母さんが子どもに話しかけ「これも大事な米だよ。帰ったら一升瓶に入れて突いて食べようね」。それでも拾いきれない米粒は「これは鳥さんたちにおすそわけだね」と。そのとき子どもは「鳥さんたちは僕たちより先においしいお米が食べられるんだ。幸せだね～」こんな会話を耳にし、私は「こういう親子の会話こそ畑(田んぼ)からの贈り物だ！」と感動で胸がいっぱいになりました。稲刈りの体験を通して、日本人の主食であるお米と田んぼへの感謝を素直に表現する子どもたちがそこにいました。これが畑からの贈り物だと思うのです。

これからDECOポンを活用するデンソーの仲間のみなさんと、「日本の畑からの贈り物」を受け取れる場をたくさんつくっていかこうと思っています。どうぞよろしくお願ひします。



左端が師匠の生産者・杉浦剛さん。
丁寧に田んぼのことを教えてくれる
頼もしい存在です



今年も愛知県知多半島で
米作り隊の田植えを予定しています

みなさんは「エコライフ」と聞いて、どんなエコ行動を連想されるでしょうか？ ある人は「電気をこまめに消すこと」を挙げるかもしれません。また、「アイドリングストップ」と答える人もいらっしゃるでしょう。こうした一つひとつのエコアクションに取り組むことが、環境や地球に負荷をかけないライフスタイルにつながっていくことはいまでもありません。でも、巷でよく聞くエコライフは、「なんだか窮屈で長続きしないなあ…」と覚えることがあるのも事実。それらのアクションがいくら環境にやさしくても、自分に無理して負荷がかかってしまえば、本末転倒になってしまいます。そこで、この「デコボン・ライブラリー」では、自分も環境も気持ちいいエコライフを実践するために、みなさんが楽しんで取り組める本や映画、音楽などをデコボンがご紹介していきます。

第1回目は、「第2回DECOボンセミナー」で配布したアクションリストから、世界各地の貧困問題と日々の暮らしでできることを提示する書籍等をリストアップしました。知ることから始めてみましょう！

書籍



Book

世界から貧しさをなくす30の方法

／合同出版／田中優・榎田秀樹・マエキタミヤコ編

「貧しさ」とは、豊かな国の側が作った世界の仕組みの問題でした。私たちが日ごろ食べたり使ったりしている物を通じて、暮らしとのつながりから、その仕組みの問題点を提示。身近な生活の中から変えていく方法を学びます。



Movie

映画

ダーウィンの悪夢

／2007年5月ごろまで全国各地で上映中

タンザニア第二の都市ムワンザを舞台にしたドキュメンタリー映画。「ダーウィンの箱庭」と呼ばれたアフリカ・ビクトリア湖の豊かな生態系が、外来魚「ナイルパーチ」の放流で壊滅的な打撃を受ける一方、欧米や日本へ輸出するためのナイルパーチ漁が盛んになりました。グローバル化の進行によって、現地の人々がより厳しい生活を強いられるようになっていると主張しています。フーベルト・ザウパー監督。

<http://www.darwin-movie.jp/>

音楽



Music

Bono (U2)



2005年、HIV患者支援のためのチャリティ・ソングをリリース。収益は全て非営利団体「Keep A Child Alive」へ寄付され、HIV患者への医薬品配布のための資金として利用されています。2006年には、売り上げの一部を世界基金に寄付し、世界基金を通してアフリカのエイズ対策に使われる、新商品ブランドREDを立ち上げ、アメリカン・エキスプレス、コンバース、ギャップ、アルマーニなどが協賛しています。

ウェブサイト



Website

ほっとけない世界のまずしさ
<http://www.hottokenai.jp/>

2005年の夏ごろから腕に白いバンドを付けている人を国内でも見かけるようになりました。これは、世界約90カ国以上で行われているG-CAP (Global Call to Action Against Povertyの略) という世界的なキャンペーンで共通に用いられているシンボルです。日本では、長年最貧国の現場で活動してきたNGOなどが中心となって、G-CAPと連動しながら、キャンペーンを展開しています。

2007年1月21日(日)、DECOポンをデンソー社内外のみなさまに初めてご紹介するキックオフフォーラムが刈谷市産業振興センターで開催されました。当日は募集定員の200名を超えるお客様で大盛況！ DECOポンへの注目度と期待の高さを感じました。

フォーラムのサブタイトルである『「エゴなエコ」応援します』。ここでいう「エゴ」とは「自分勝手な」という意味ではなく、「自分や家族のため」という意味。「人類のため」「地球のため」といった大きなものでなく「安心できる野菜を子どもに食べさせたい」「おいしい空気を吸いたい」といった自分や家族の幸せのために取り組むエコライフを応援したい！というメッセージです。

基調講演「エゴとエコを両立した環境ビジネス」
藤田 和芳 氏 (大地を守る会)



藤田さんの著書
「ダイコン一本からの革命
—環境NGOが歩んだ30年」は必読です →

1975年、無農薬野菜の生産の働きかけをする市民運動として発足した「大地を守る会」。現在は農薬や添加物を極力使わない、安全でおいしい食材の宅配事業を中心とした環境ビジネスとして大成長を遂げています。

藤田さんは、政府や行政を告発したり糾弾したりする市民運動ではなく、前例のなかった無農薬野菜の宅配事業がビジネスとして成り立つことを示し、その可能性を提案することで社会を変えようと試みています。大きな社会運動として行うのではなく、まずは自分たちのできることからスタートしようと考えたそうです。

「まずは身の回りのことから始めることが社会につながり、世界、地球へつながっていく」。DECOポンのテーマと共通していますね。藤田さんから共感と応援のお言葉をいただきました。



発表「デンソーエコポイント制度とは」
門井 徳孝
(株式会社デンソー 総務部 企画2室 DECOポン事務局)

←「発表前はいままでないほど緊張していた」という門井さん。客席からはご家族がお父さんを見守っていました

「社員が楽しく自発的に、環境にいいことに取り組めるしくみがあればなあ…。こんな想いをきっかけに、DECOポン立ち上げまで奔走してきた門井さん。DECOポンへの情熱たっぷりの発表となりました。(今号の巻頭ではそんな門井さんの熱い想いの一端をご紹介します。)



「パネルディスカッションでは『デンソー、本気でやれよ』というメッセージを感じました」
(株式会社デンソー 経営企画部 CSR 推進室長・岩原さんによる閉会の挨拶から)

パネルディスカッション
「デンソーエコポイント制度から見るこれからのCSR」

コーディネーター

木村 真樹 (NPO法人エコデザイン市民社会フォーラム/
株式会社デンソー 総務部 企画2室 DECOポン事務局)

コメンテーター

門井 徳孝

パネリスト

伊勢戸 由紀氏(株式会社にんじん)

柴垣 民雄氏(リコー中部株式会社 CSR推進室)

胤森 なお子氏(フェアトレードカンパニー株式会社)

萩原 喜之氏(NPO法人エコデザイン市民社会フォーラム)

パネルディスカッションでは、DECOポンに関わる各ステークホルダーのみなさまとともに、CSR(企業の社会的責任)の視点から活発な意見交換が行われました。各パネリストからは、「キャラクターのデコポンがかわいい！通帳も絵本のようにわかりやすかった」(伊勢戸さん)、「DECOポンは時代と社会が必要としている」(柴垣さん)、「会社の業績によって左右されず、制度としてずっと継続してほしい」(胤森さん)、「社員一人ひとりの自発的な行動の連鎖が大切」(萩原さん)など、DECOポンのスタートを高く評価すると同時に、今後への期待と激励のメッセージをたくさんいただきました。今後もDECOポンでは年に一度、今回のような対外的なイベントを開催する予定です。取り上げてほしいテーマやご要望などがございましたら、DECOポン事務局までお知らせください。(渡辺)



第1&2回 DECOポンセミナー

報告

第1回DECOポンセミナー キャンドルナイトをやらナイト! 2006 ~でんきを消して、スローな夜を。~

日時：2006年12月18日(月)18:30～20:30
場所：本社 事務本館1F 東ロロビー
参加者数：34名

ここ数年、夏至と冬至の夜の風物詩となりつつある「100万人のキャンドルナイト」。20時から22時の間でんきを消してキャンドルのあかりで夜を過ごす「暗闇ムーブメント」です。照明を落とし、黒いシルエットとなった名古屋城や東京タワーの様子をテレビや新聞で見かけた方もいらっしゃるのではないのでしょうか。

冬至4日前のこの日、第1回DECOポンセミナーはこの「キャンドルナイト」をテーマに開催されました。100万人のキャンドルナイト事務局の大野由紀恵さん(大地を守る会事務局)にお話を伺った後、みつろうキャンドルづくりに挑戦! 講師のゆっくり堂・小形恵さんの進行に従い、溶かしたみつろうにたこ糸を漬けて引き上げるという単純作業を地道に繰り返します。ゆっくり、ゆっくり形ができるキャンドルは、急ぐと逆にくずれてしまい、最初からやり直し。参加のみなさんは「まさにスローライフ!」と、日々の忙しさを離れてキャンドルづくりを楽しんでいました。(渡辺)



世界にひとつだけのキャンドルづくりを楽しむみなさん。どんな冬至の夜を過ごされましたか?

第2回DECOポンセミナー バレンタインに贈りたい人! ~フェアトレードのチョコはいかが?~

日時：2007年2月12日(月)18:30～20:30
会場：本社 第3技術本館 1Fホール
参加者数：27名

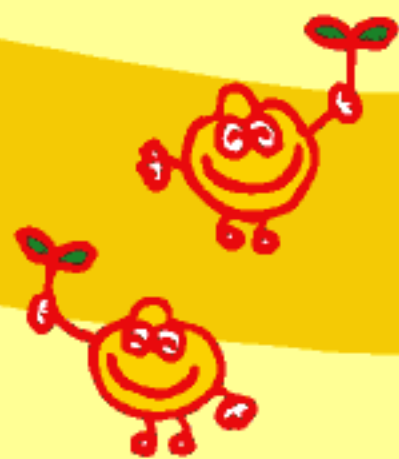
第2回目のDECOポンセミナーは、バレンタインデーにちなんで「フェアトレードのチョコレート」をテーマに開催されました。「フェアトレード」とは、発展途上国の産品を適正な価格で買い、安定した取引を保障する貿易のかたち。DECOポンでは、ポイント発行・還元メニューの双方にフェアトレード商品を採用しています。試食用に用意されたチョコレートをほおぼりながら、フェアトレードカンパニー株式会社・胤森なお子さんの講演「チョコを選べば、世界が変わる」を伺いました。

私たちの国では「愛のあかし」として贈られるチョコレート。反面、原料のカカオが採れるアフリカや南米では、子どもの労働や人身売買、環境破壊の原因の一端となっているという現実もあります。単に「安いから」買うのではなく、フェアトレードの商品を選び、利用することが、現地の人々の経済的な自立を応援し、環境保護への貢献に繋がることを知りました。(渡辺)



ワークショップで“指ずもう”に取り組む参加者のみなさん。「気づいたら争ってしまっていた」自分にドッキリ。

告知



DECOポン出張勉強会 開催のお知らせ

DECOポン事務局では、デンソー社員のみなさまのDECOポンへの理解とその参加を促進するために、担当者が各職場にお伺いしてお話をさせていただく「DECOポン出張勉強会」をご要望に応じて開催することになりました。DECOポン通帳やウェブサイト、マニュアルからではなかなかわかりにくいDECOポン誕生の背景やそのしくみ、実際の活用方法などについて、質疑応答も交えながらご紹介をさせていただきます。

日時や開催時間、人数、内容につきましては、常時ご相談に応じます。各部署での職場懇談会や個別勉強会などに、この機会をぜひご利用ください。



↑ 2007年3月23日に開催した本社・品質管理部での勉強会の様子 ↑



にんじんCLUBさんからいただいた「にんじん」を何も教えず生のまま息子(7才)に食べさせたら、「おいしい!」と驚いていました。にんまり (^_^)v (門井)



先日、小田原に行ったとき、名産である 甘まぼこの唄を耳にしました。「K・A・M・A・B・O・K・O!ヘルシー」。DECOポンの唄がほしくなりました(笑) (木村)



バレンタインにフェアトレードのチョコを職場の女性にもらいました。家族にしたり顔でフェアトレードの話をしっちゃったりして。いままでの義理チョコより自慢ができました (小山)



最近、フェアトレードのチョコにはまっています。オーガニックだから、身体も「おいしい~!」と喜んでいます。レーズンやナッツ入りはさらに得した気分 (渡辺)



デンソーエコポイント制度ニュースレター：デコ通(デコツウ)

発行日：2007年4月1日 初版第1刷

発行人：山中高之介

編集：株式会社デンソー 総務部 企画2室 DECOポン事務局

デザイン：ORGANデザイン室

印刷所：株式会社デンソーユニティサービス

(C)株式会社デンソー 2007年 Printed in Japan 落丁・乱丁本はお取り替えます。

【お問い合わせ/お申し込み先】

株式会社デンソー 総務部 企画2室 DECOポン事務局
担当：門井、木村、小山、渡辺

TEL:0566-63-7515(内線:551-49980)

FAX:0566-25-4962(内線:551-92430)

URL: <http://www.denso.co.jp/SOCIAL/decopon/>

E-mail: DECOPON_INFO@denso.co.jp